

「反抗的人間」とは何か

——アルベール・カミュ『反抗的人間』（1951）より
序説及び第一章「反抗的人間」を手がかりに

大田恵里奈

キーワード：カミュ、不条理、反抗、殺人、自殺

はじめに

アルベール・カミュ（Albert Camus, 1913-1960）は、戦後フランスを代表する作家である。カミュは独立前のアルジェリアに生まれ、第二次世界大戦を経た時代状況のなかで、人間の存在をめぐる根源的な問題を「不条理」という概念において提示した。小説・戯曲・評論と多岐にわたる著作活動を展開し、とりわけ小説の『異邦人』（*L'Étranger*, 1942）、『ペスト』（*La Peste*, 1947）などの文学作品と『シーシュポスの神話』（*Le Mythe de Sisyphe*, 1942）や『反抗的人間』（*L'Homme révolté*, 1951）といった哲学的エッセイによって広く知られている。

『シーシュポスの神話』では、哲学上の真の問題は「自殺」であると問題提起し、理性では割り切れない世界・自然とそれに対する人間の奥深い欲求との間に維持される「不条理」を見出して、そこに人間が生きる上での幸福の根底を見た。『異邦人』のムルソーは、死刑を待つなか、世界が、自然がただそこにあるという「不条理」を正面から受け止めて、孤独ではないこと、そして幸福であることを悟る。この思想は実存主義としばしば同義と見られるが、実存主義の提唱者ジャン＝ポール・サルトル（Jean-Paul Charles Aymard Sartre, 1905-1980）と対立し、独自の立場を保持している。とりわけ『反抗的人間』において提示される「反抗」の理念は、その言葉から連想されうる他方への単純な否定や一方的な破壊ではなく、人間が人間として、尊厳をもって生きるための肯

定的契機として構想されている点において重要である。本書を検討することは、カミュの思想をより深く理解するうえで不可欠であり、同時に20世紀において人類が直面した倫理的・社会的課題を考察する手がかりとなる。

ここでは、カミュの思想を深く理解するための準備として、『反抗的人間』の最初の序説と第一章の基本的な含意を読み解いてみたい。

分析 1：序説 (p. 9-16)

カミュは「論理的犯罪」(p. 9)に焦点を置き、犯罪の中でもとりわけ「殺人」についての分析を行っている。カミュは、「論理的犯罪」としての「殺人」が法の下で「無罪」を主張することができることを問題視している。

アリバイは万能の哲理であり、殺人犯を裁判官に変えてしまうほどである。(p. 9)

暴君が町々を亡ぼして最高の栄光と誇ったり、奴隷を征服者の戦車につないで戦捷を祝う町々を引き廻したり、また人民を集めて、その面前で敵を猛獣に投げあたえたりした時代には、こんな素朴な犯罪にたいして、良心は厳然たりえたりし、批判も明確に下すことができた。しかし、自由の旗印をかかげた捕虜収容所や、人間愛とか、超人崇拜によって正当化された殺戮は、ある意味で、批判を不可能にする。(p. 9)

「アリバイ」がある限り、「殺人」は「無罪」であると、正義であると振る舞うことができるのだ。この「アリバイ」というのは、「殺人」を犯した理由であり、ある意味で「殺人」を正当化できる手段である。多くの者にとっての圧倒的な理不尽が町を闊歩していた時代には、あらゆる犯罪行為が正当に批判されてきた。しかし、ナチスドイツが理想実現のために行われたユダヤ人の大量虐殺を皮切りに、病気に苦しむ人を思いやって、あるいは現状を打破するためにやむを得ず、など、情状酌量の余地ありと判断されうる「アリバイ」を掲げてしまえば、たとえ人を殺したとしても許されてしまうのである。それどころか、その行為を批判してしまえば、こちらが悪だと断罪される可能性まである。大義名分さえあれば、どれだけ残虐な行為も正義を振りかざすことができるのだ。

アウシュヴィッツ収容所には、「働けば自由になる [Arbeit macht frei]」と言って、ユダヤ人たちに何に対しても分からない、ナチスドイツにいわせれば存在することに対する贖罪の機会を与えるという建前があったのだろうか。だとすれば、ナチスドイツは、大義名分に大義名分を重ねた強固な構造だったといえる。

今日では、他人だけがごまかしをするので、イデオロギーは、その他人を否定するだけだ。そこで彼らを殺す。朝ごとに、あくどい服装をした暗殺者が、独房（細胞⁽¹⁾）に入りこんでいく。殺人、それが問題だ。(p. 10)

『シーシュポスの神話』では、「自殺」を問題に挙げていた。この生は無意味であると自己否定してまで、神のまやかしも、神に賛同する他の人びとの「ごまかし」もふりきって、「自殺」する。30年前⁽²⁾までは、この「自殺」という個人の問題に焦点を当てて考えるだけで十分だった。だが、現代は神ではなく、他の人びとが主義思想をもって我々をごまかしてくる。正義の「殺人」が、他の者に、あるいは我々に矛先を向ける瞬間がやってくるかもしれない。もはや個人の問題では済まされなくなったのだ。

これがカミュの問題提起である。カミュは、「自殺」及び「殺人」が「不条理」において肯定されるか否かを議論した。

不条理の感情からまず行動の準則を引きだそうとすると、殺人などという行為は少なくともどうでもいいことになり、したがって人殺しをしたってかまわないことになる。なにものもせず、すべてが無意味であり、われわれがどんな価値も認めることができないならば、すべてが可能となり、なににも重要でなくなる。(p. 11)

「不条理」の前では、あらゆるもの、あらゆる行為が無意味になる。生きることすらも例に漏れない。したがって、「殺人」は「どうでもいいこと」になる。これを自分が行おうが他人が行おうが、「不条理」を目の前にしたら気にする必要がなくなるのだ。そこに善悪の価値判断は存在しない。人びとは何の行動を起さず、ただ人が人に殺される様を眺めるだけになる。あるいは、善悪に依らぬ、「最も効果的な、つまり最も強力な態度」(p. 11)をとるようになるだろう。であれば、「殺人」が一時的な価値基準となり、この強烈な行為が世にのさ

ばることになる。善悪のない弱肉強食の世界が実現されてしまうのだ。

よって、「殺人」は間違った行為ではないということになるのだが、一方でこの行為を「不条理」は非難するのである。その理由は、カミュが『シーシュポスの神話』にて導いた「不条理」の推論によると明らかである。

不条理の推論の最後の結論は、事実、自殺を拒否すること、人間の問いと世界の沈黙との間に、絶望的対立を保つことなのである。自殺は、この対立の終結を意味するだろうが、不条理の推論は、それ自身の前提を否定しなければ、この終結に同意できないだろうと考えている。自殺という結論は、この推論に立つと、逃避か、解放となる。だが同時に、この推論によれば、生があればこそ、この対立が可能となり、生がなければ、不条理の賭は支柱を失うのだから、生が唯一の必然的善として認められることは明白である。生が不条理であると言うためには、意識は生きている必要がある。(pp. 11-12)

『シーシュポスの神話』では、結論だけ言うと、「不条理」は「自殺」を拒否することに成功した。「不条理」にとって、すべてがなにもものも意味しない。それは確かだが、「不条理」は、人間の真理を求める不断の問いと、理性を超越した世界すなわち自然との対立によってはじめて存在することができる。「自殺」をするということは一方の対立項をなくすことであり、それは「不条理」からの「逃避」である。世界へ問いかけ続けることを諦めたということだ。思考を止めて生き永らえることも、宗教に人生を委ねることも、「哲学上の自殺」⁽³⁾だとカミュは批判した。だとすれば、「不条理」に対抗するには生きることこそが最善の手段だということになる。簡潔に言えば、意識的に生きることが「不条理」に対抗する唯一の手段であるということだ。

絶対的否定は自殺によっては、徹底しえない。自己と他人との完全な破壊を行なってはじめて徹底する。少なくとも、こうした痛快な極端に向って進まなければ、絶対的破壊を生き通すことはできない。自殺と殺人は、ここでは同じ世界、つまり、限定された条件を耐え忍ぶことより、天地が絶滅する暗黒の興奮を好む、不吉な知性の世界の両面なのである。(p. 13)

人間の問いと、世界の沈黙との間の対立の前では、殺人も自殺も同じことであり、両者をともに取り上げるか、ともに拒否するかのいずれかでなければならない。(p. 12)

ところで、「自殺」は「絶対的ニヒリズム」(p. 12)に起因する自己の否定である。先に述べたように、「自殺」は「不条理」における一方の対立項の否定であり、「不条理」のある種軽蔑すべきことなのである。ここで「自殺」を拒否するならば、「殺人」も同様に拒否すべきこととなる。逆にいえば、「自殺」を実行するならば、世界中の人びとを道連れにしてこそ、「誠実」な態度であるといえるだろう。自分だけを殺す、あるいは他人だけを殺すという、中途半端な判断は許されないのだ。

「不条理」の前では、「自殺」も「殺人」も同じであり、両者とも肯定するか拒否するかのどちらかの選択しかない。ここで問題なのが、「不条理」は両者に可能にも不可能にもすることができるということだ。「殺人」を肯定した論理が、同時に「殺人」を根本から否定する根拠となるのだ。

「不条理」は矛盾そのものである。現に生きている我々からあらゆる価値判断を奪い去りながらも、生きることを称賛するのだ。

特権的な感動を基にして、一つの態度をうちたてることはできないのである。不条理の感情とは、特殊な感情である。[...]ある感情がいかに烈しくとも、それが普遍的であることにはならない。(p. 14)

私は、なにも信じない、すべてが不条理だ、と叫ぶ。しかし私は、私の絶叫を疑うことはできない。少なくとも、私の抗議を信じなければならぬ。不条理の経験のなかにあって、私にあたえられた、最初の、唯一の明証は、反抗である。(p. 15)

「不条理」が我々から判断基準を取り除くならば、我々が「殺人」という犯罪から正当なもつともらしい理由を抜き出すことは不可能だということと同義である。「殺人」という、ただその結果が残ったという事実を知ることしかできない。あらゆる「アリバイ」やその推測が無意味となるのだ。まさに「不条理」である。だが、カミュは、デカルトの方法的懐疑と同様の帰結を見出す。「不条理」を嘆く「私」の抗議は、疑いようがない。「不条理」の論理だけでは辿り着けなかった真理への足掛かりを、カミュは見つけたのだ。カミュは、「不条理」を前に「殺人」を拒否することができるのが、「反抗」なのだと考えた。

反抗は、不当な、理解しえぬ条件を前にして、不条理の光景から生ずる。だが反抗の盲目的な飛躍は、混沌の只中に秩序を要求し、逃げ去り、消え行くものの只中に統一を要求する。反抗は、醜聞が止むことを、そしてこれまでは休みなく、海上に描かれていたものが固定することを叫び、要求し、望む。その関心は、変形させることにある。しかし、変形させるとは、行動することだ。そして、行動するとは、明日になれば、人を殺すことになるだろう、殺人が正当かどうか、反抗が知らないならばの話だが。反抗は、まさに、正当化を求められている行為を生み出すことになる。(p. 15)

「反抗」とは、「不条理」を前に変化することを要求する一つの態度である。ただあるがままを受け入れるのは我慢ならない、ある一点を変形させることを望む。それは政治であったり、運命であったり、天災であったりする。「ペスト」は、もともと運命ではなかったが、天災である「ペスト」が我々を選んだとき、それは運命になるのかもしれない。これらに対し、こちらの正当性を示すために、現状を覆すために、相手の変化を望む。その要求の仕方は、革命という形をとって、人を殺すかもしれない。だが、これは「殺人」を真っ向から否定したカミュの望むところでは決してないだろう。「反抗」はそれを見極めることができるのか、カミュの「不条理」の推論の展開はそこに懸かっているだろう。

分析2：第一章「反抗的人間」(pp. 17-25)

序説にて「反抗」の論理の糸口を発見した。「反抗」を体現する「反抗的人間」とは、いったいどのような人物なのか、カミュは以下のように説明している。

反抗的人間とはなにか？ ^ソ否と言う人間である。しかし、拒否しても、断念はしない。最初の衝動から、^{ウイ}諾と言う人間でもある。(p. 17)

ここでは主人と奴隷の例が挙げられており、今までどんな命令にも耐えていた奴隷が、ある時突然、主人の命令を拒否する瞬間、その奴隷は「反抗的人間」となったのだ。だが、その拒否によって相手を排除することはしない。「断念はしない」とは、そのようなことであろうか。相手を徹底的に叩きのめして亡き

者にするのは、単純明快であるが、それを是としないのがカミュらしいところである。

反抗の衝動は、単なる拒否よりも、はるかに遠方まで、彼〔奴隷〕を押しやる。いまや彼は、同等に扱ってくれと要求し、相手に対してきめていた限界までも超えてしまう。はじめは、人間の止むに止まれぬ抵抗であったものが、全人間そのものとなり、つぎには、抵抗と一体となり、抵抗そのものに化してしまう。彼が尊敬してもらいたいと思っている、彼自身のこの部分を、そのときは、他の部分より重んじ、そして、すべてよりも、生命より以上に尊いと宣言する。それは、彼にとって、最高の善となる。〔…〕意識が、反抗とともに、生れたのである (p. 18)

「反抗」の衝動に駆られた彼、「奴隷」は、今まで耐えてきた奴隷としての境界線を踏み越えてきた侵入者、すなわち奴隷に対する「主人」に対し、自分を相手と同等に扱おうと求める。このとき彼は、彼のなかで特別な価値が侵害されるのを絶対に阻止しようと、激しく「抵抗」し、自分自身を主張する。この「抵抗」との一体感が、人類との普遍的な絆を生み出している。「抵抗」そのものとなった彼は、「生命」以上に今の状態を重んじ、死すらも受け入れようとしているのだ。「不条理」において、「意識」的であることは重要なことである。「意識」的に生きることは、『シーシュポスの神話』でも生きる上での重要事項として説いていた⁽⁴⁾。

反抗的行動は、本質的には、利己的行動ではない。むろん利己的決意はあるかもしれないが、人は圧迫に対すると同じように、虚偽にたいしても反抗するだろう。その上、こうした決意から出発してすばらしい昂揚に達する反抗者は、いっさいを賭けているのだから、何物も保存したりはしない。彼自身にたいする尊敬を必ず要求するが、それは彼が生来の共通性と一体化した場面に限るのである。(pp. 19-20)

何かしらの価値によって引き起こされる「反抗的行動」には、個人からはみ出す普遍的な何かが見受けられる。「反抗的行動」は、誰かが理不尽な仕打ちを受けている場面を目撃した場合にも引き起こされるという。また、「虚偽」、すなわち「ごまかし」は、先に述べたように、日常生活の根幹に潜んでいることもあるのだ。それに対しても、「反抗」の決意は起こりうる。「反抗」を決意す

るのは個々人次第だが、守ろうとする価値というのは、他人とある意味共有しているものである。尊厳とは、それを脅かす他者から守ろうとするときに烈しく光るのだ。

利害の共通性の感情もまた、ここでは問題にならない。事実、われわれが敵とみなしている人々に課せられた不正を、見るのが堪えられないと思うこともある。ただ、運命の一体化と、同志意識だけが存在する。だから個人がまもろうとする価値は、彼だけのものではない。価値をつくるには、少なくともすべての人が必要である。反抗においては、人間は他人のなかへ、自己を超越させる。(p. 20)

また、敵とみなしているはずの者が圧制を強いられている状況であっても、その敵と連帯して「反抗」を決意する場合がある。そこにあるのはまるで運命共同体としての連帯感のみがあるという。いかなる他人の場合であっても、それこそ敵であっても、そこに絆を感じ、共通する普遍的な価値を守ろうという仲間意識が存在する。「反抗」という意識は、個人を超越して集団に伝播するとカミュは考えている。街中を練り歩くデモに内包されているように感じる一体感は、この「反抗」の伝播によるものだろうか。

補足的に、カミュは「反抗」とシェラー (Max Scheler, 1874-1928) が定義した「怨恨」との違いを以下のように示した。

怨恨とは、自分の恨んでいる者が、苦しむのを見たいと思い、その相手の苦しみを前もって楽しむことらしい。[...] 反抗は、それと反対に、他人の屈辱を求めず、屈辱を拒否するだけである。自己の完全性をまもるためなら、苦痛をも甘受するのだ。(p. 21)

シェラーとは反対に、反抗的行動には、それをつらぬく情熱的肯定があることをここで大いに強調したい。情熱的肯定のあることが、怨恨と異なる点である。反抗は何物も創造しないから、外観は消極的だが、人間の裡にあるつねにまもるべきものを啓示しているがゆえに、ほんとうは積極的なのである。(p. 22)

「怨恨」とは、他人に対する「羨望」(p. 21) がつきもので、他人を打ち負かし、他人が持つものをあわよくば奪い去ろうという気概さえある。一方で、「反

抗」とは、いくら憎い相手であっても、その者を痛めつけることを望まず、自身がかもつとも重んじる価値に傷をつけられないように、自身が屈辱を受けるのを受け入れないことである。必要であれば、死ぬまでしてその価値を守り抜こうとする。そこには「情熱的肯定」があり、『嵐が丘』でヒースクリフがキャサリンとともにあるために地獄を選ぶのは、そういった情熱が突き動かしているとかミュは説明する。

反抗とは、自己の権利を意識した、明識の士の行為である、ということ。しかし、個人の権利だけが問題であると言うことはどうしてもできない。それどころか、前に指摘したような連帯性により、人類が冒険の過程において人類自身について抱く、ますます拡大されていく意識が、問題となるようなのである。(p. 23)

これまで述べた通り、「反抗」とは、個人が決意するものであつても、そこに掲げられている価値は人類が持つ普遍的なものである。この価値ある「意識」は伝染病のように人類のうちに拡大していくのだという。人類は「神聖の世界」(p. 24)を離れ、社会のなかで謀反を起こしたりしながら歩みを進めてきた。それは「歴史」にこそ体现されているのだという。これは、「反抗」が「人間の本質的次元の一つ」(p. 24)であることを証明している。

反抗的行動がはじまると、それは集団的であるという意識を持ち、万人の冒険となる。だから、自分が異邦人であるという意識にとらえられた精神の最初の進歩は、この意識は万人とわけ合っているものだという事、人間的現実は、その全体性において、自己からも世界からも引き離されている距離に悩むものだという事を認める点にある。(p. 25)

反抗は、すべての人間の上に、最初の価値をきずきあげる共通の場である。われ反抗す、ゆえにわれらあり。(p. 25)

我々は、「不条理」によって自分が異邦人であるという感覚を覚える。その「不条理」の感覚を生きつつ、とあるきっかけで「反抗」の精神を呼び起こす。「不条理」に圧倒されていた意識に「反抗」の精神が灯ったとき、全人類との絆を感じる。「反抗」とは、全人類が共通の意識を持っているという真理に気づか

せるきっかけであり、これによって個々人の意識に光が灯される。「反抗」を知ったとき、はじめて自分が存在することを、そして我々が存在し、一体であることを確信するのだろうか。デカルトにちなんだこの「反抗」の論理は、カミュが説く思想を端的に表しているのだろう。

まとめ

アルベール・カミュの『反抗的人間』序説および第一章では、「不条理」の認識から出発した人間がいかにして「反抗」にたどり着くかが論じられている。カミュは、『シーシュポスの神話』において「自殺」を拒否することによって「不条理」に対する誠実な態度を示すことができるという結論を導いたが、本書では「殺人」という行為に焦点を移し、それを正当化する「アリバイ」の欺瞞を告発する。現代においては、イデオロギーや人道的理念が「殺人」を容認させる「アリバイ」として機能し、善悪の判断を麻痺させてしまう。そこで、カミュはそのような欺瞞に対し、価値判断を剥奪された「不条理」の只中においても、なお人間が自らの尊厳を守るために行う「反抗」に希望を見出す。「反抗的人間」とは、ただ否定して相手の存在そのものを徹底的に排除するのではなく、他者との連帯を通じて肯定的な価値を立ち上げる者であり、自らの意識を超えて普遍的な人間性を守ろうとする。「反抗」は自己の尊厳と他者の尊厳の共通性を認めることであり、それゆえ殺人をも否定する根拠となる。すなわち、カミュにとって「反抗」とは、「不条理」によって孤立した意識が他者とつながり、個々人が真の人間性を取り戻すための創造的な態度であるという。

カミュはおそらく「反抗」に革命とは違う態度を見出していると考えられる。「反抗」によって他の者が傷つくのは、それこそ「殺人」と結びつきかねない。「反抗」には、その対立する者との対話を要求する姿勢があるように思われる。カミュにとって、対等性を求めるという理念は、革命という動きからは導かれないのだろうか。カミュの革命の犠牲者への洞察は、『正義のらびと』に読み取ることができると考えられるため、『反抗的人間』と並行して読解を深めていきたい。カミュはきっと、革命の犠牲者が独裁者であろうと、革命を批判するのだろう。むしろ、その者を孤独のまま終わらせようとはせず、目の前にあるは

ずの「不条理」を気づかせ、「反抗」の意識を目覚めさせようとするのではないだろうか。革命によってその者を我々と共にする世界から永久に縁を切らせるのではなく、「反抗」によって掬おうというのが、カミュの狙いではないか。

使用文献

アルベール・カミュ（佐藤朔・白井浩司訳）『カミュ全集 6 反抗的人間』新潮社、1973年
アルベール・カミュ（清水徹訳）『シーシュポスの神話』新潮社、1969年初版、2006年
改版

Albert Camus, *Œuvres complètes*, tome I, III, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade »,
2006, 2008.

アルベール・カミュ（窪田啓作訳）『異邦人』新潮社、1954年初版、2014年改版

註

- (1) 参照・引用させていただいている本文の翻訳において、*cellule* (*Œuvres complètes*, tome III, p. 65) は「独房」と翻訳がされているが、独房とは受刑者や容疑者のための一人用の監房、すなわち独居房のことで、暗殺者がわざわざ独房に入りこむという状況はいささか奇妙に思われる。一人部屋というニュアンスだけならば、「個室」などが適切かと考えられる。また、「個室」以外ならば、社会という大きな組織の中に暗殺者が入りこむということから、「細胞」という翻訳も問題ないだろう。だが、この「独房」の一つに『異邦人』のムルソーのように死刑あるいは（ムルソーからは物理的に取り上げられた手段の）自殺を待っている者がいることを鑑みると、「独房」という翻訳もふしぜんではないとも考えられる。なお、『異邦人』でも、ムルソーが死刑執行を待つ間に収容されていた場所、*cellule* (*Œuvres complètes*, tome I, p. 204) は「独房」（『異邦人』、p. 137）と翻訳されていた。
- (2) この「30年前」というのがどのような時代だったのか、今後調べることにする。
- (3) 『シーシュポスの神話』（1969）、p. 75。
- (4) 『シーシュポスの神話』、p. 110 「同じ年数を生きたふたりの人間に対して、世界はつねに同じ量の経験を提供する。それを意識化するのは受取るほくらの側の問題だ。自分の生を、反抗を、自由を感じとる、しかも可能なかぎり多量に感じとる、これが生きるということ、しかも可能なかぎり多くを生きるということだ」。